

参加動機にみる断酒会の意義に関する一考察

— 参加観察と面接法により —

加藤 彩

§ 1 問題意識

現在、アルコール依存症治療プログラムにおいて、断酒会をはじめとする自助グループの存在は不可欠なものである。しかしながら、自助グループに関する心理学的な研究は少なく、同じ治療資源として臨床心理学的立場との相互理解は必須だと思われた。そこで、本研究においては、我が国のアルコール依存症の代表的な自助グループである断酒会を対象とし、参加観察と面接を通して、アルコール依存症の回復過程において自助グループが担っている役割を探索的に研究し、一考することを試みた。

§ 2 目的

研究・1の目的はアルコール依存症者の断酒例会通いと断酒継続との関係を探索的に研究することであり、先行研究の少ない本分野においては問題意識の発見でもあった。研究・2においては、研究・1の参加観察から断酒会の認識、参加動機とアルコール依存症の回復の一步である病識の受容との関連性と会での体験が断酒継続の何らかの支えになっていることが推測されたため、対象者の会に対する認識・参加動機とアルコール依存症の受容及び、参加者の断酒継続の支えに注目することでアルコール依存症の回復過程における断酒会の意義を一考することを目的とした。

§ 3 方法

研究・1においては、平成10年6月～12月にM県内の断酒会例会において参加観察した。研究・2においては、面接法を用い、対象は事前のアンケートにおいて面接に同意してくれた断酒会員16名である。対象者は全員男性、年齢は33歳から70歳、断酒歴は1年から25年である。面接内容は断酒に関する被験者自身の主観的な気持ちや考えを語ってもらう中で、現在の断酒会参加動機をできるだけ自発的に引き出すことを考慮し、次のような内容の質問を行った。

1)「断酒のきっかけ」、2)「断酒会の第一印象」、3)「断酒会、断酒会通いについてどう考えるか」、4)「体験発表について」、5)「断酒会の仲間について」、6)「家族の支えについて」、7)「断酒会に入って良かったこと」、8)「断酒して良かったこと」、9)「断酒した今

の自分をどう思うか」

§ 4 問題提議と結果

まず、研究・1では5つの問題を提議した。

- (1) 断酒会という固定した環境で相対的に自己と他者の変化を感じることが断酒会の意義の1つではないだろうか。また、固定した環境とは安定した環境でもある。共有でき、安定した空間や人物、テーマが参加者に新しい愛着を提供しているのではないだろうか。
- (2) アルコール依存症の心理的な回復過程、すなわち否認の克服過程と会への関わり方の過程には関連があるのではないだろうか。
- (3) アルコール依存症者の自発的な内省以外の断酒継続の支えと何か。この支えとは自助集団の特徴でもあり、依存症の回復の鍵になるのではないだろうか。
- (4) 参加者にとって断酒会とは何だろうか。酒を止めるための場所以外のものがあるのではないだろうか。
- (5) 古参者の参加目的は何なのだろうか。ケアの与え手という意識と関連があるのであろうか。新参者と古参者の断酒継続の支えには違いがあるのだろうか。

そこで、問題(1)と(5)については後の課題とし、本研究においては問題(2)(3)(4)で提議された内容に焦点をあて、研究・2において一考した。

研究・2では、面接で語られた内容から、入会当時と現在の断酒会への参加動機・認識のタイプと、アルコール依存症の受容の深度によってケースを分類し、検討した。

(A) グループ…3事例

入会時、会に対して肯定的な参加動機を持ち、アルコール依存症の知識、断酒の理解もできていた一群。現在も会に対して肯定的で、新しい価値観のもとで断酒に新たな意義を見いだしている。

(B-1) グループ…1事例

入会時、会に対してアンビバレントな参加動機を持っていたが、アルコール依存症の知識、断酒の理解はできていた事例。現在、価値観の転換はなく、会に対しては肯定的であるが、断酒に対してアンビバレントな感情を抱いている。

(B-2) グループ…2事例

入会時、会に対してアンビバレントな参加動機を持っていたが、アルコール依存症の知識、断酒の理解はできていた一群。現在は会に対して肯定的で、新しい価値観のもとで断酒に新たな意義を見いだしている。

(C-1) グループ…6事例

入会時、会に対して否定的な参加動機を持っていたが、アルコール依存症の知識、断酒の理解はできていた一群。現在は会に対して肯定的で、新しい価値観のもとで断酒に新たな意義を見いだしている。

(C-2) グループ…4事例

入会時、会に対して否定的な参加動機を持っており、アルコール依存症の知識、断酒の理解も乏しかった一群。現在は会に対して肯定的で、新しい価値観のもとで断酒に新たな意義を見いだしている。

§5 考察

事例の検討から断酒会での体験がアルコール依存症の受容にきっかけや影響を与えており、受容の深度と会への参加動機・態度は相互に影響し合っていることが示された。受容が深まるほど、会に対して断酒以外の意義を見だし、関わり方も積極的になることもわかった。アルコール依存症の病理の中核は「否認」と言われるが、Blume, S (1978) はアルコール依存症者の否認を2つの段階に分けている。「第一の否認」とは飲酒問題そのものに対する否認であり、「第二の否認」とは、対人関係障害や不適応のすべてを飲酒問題に起因するものと考え、断酒の達成がすべてを解決したと見なすことである。事例の検討から断酒会での体験は「第一の否認」「第二の否認」を克服するのに一役かっており、「第一の否認」の克服は本研究で言う「知識的な病識の受容」と、「第二の否認」の克服は「実感を伴った受容」と重ねることができると思われた。事例から「第一の否認」「第二の否認」がともに克服していれば、より安定した断酒継続を可能にすると推測され、また、「第一の否認」を克服するまでの初期の断酒の支えとは、仲間同士で交わされる約束を守ろうとする会の中での忠誠心 (loyalty) が

大きな影響を与えていることが窺われた。断酒会の有効性とは、断酒が継続されるにつれ、自己洞察や新しい価値観に気づき、それがさらなる支えとなり、行動の変容を促しており、心理的な変化と行動の変容、あるいは個人の力動と集団の力動が半永久的に影響し合うことであると思われた。すなわち、長期間にわたる安定した断酒継続の鍵は「loyalty・自己洞察・新しい価値観」であり、それらの断酒の支えは終わることなく繰り返され、成熟するにつれ、相互性を増していく。これは成熟したSHGの特徴であるヘルパーセラピー原理に当てはまることであり、研究・1でヘルパーセラピー原理を会の中で実践できることがアルコール依存症の心理的回復の指標と示唆したことと一致した。

一方、断酒会の中の個人について一考すると、断酒会における仲間同士の見通し(経時的な広がり)やライバル意識(同時的な広がり)が断酒の支えとなっていることが幾度か語られた。平木(1996)はloyaltyを親友や恋人同士、夫婦などが持つ「水平のloyalty」と年齢差や世代間に存在する「垂直のloyalty」に分けているが、参加者が語る「ライバル意識」と「見通し」はこれに相当するものだと思われ、筆者が断酒会で感じた安定感の源とも言えるものとはこのような縦横に張られた絆であり、このようなloyaltyという見えないコミットメントこそ集団の中に貫かれた意識であり、それは共有できるテーマに基づくものであると考えられた。

以上、本研究から、アルコール依存症者が安定した長期の断酒を継続するには、否認の克服、すなわち病識の受容が必要であり、断酒会において一人一人の依存症者はloyaltyという見えない絆(コミットメント)で結ばれることによって行動が変容し、自己洞察、新しい価値観に気づき、また行動を変容するといったエンドレスな相互作用が働いていることが示唆された。本研究においては、探索的であっただけに参加観察を続けるほどに新たに気づく点も多かった。それらについては今後、十分な検討とより深い考察が必要であると思われる。